



ウクライナでのトレイルO世界選手権(WTOC2007)に先立つウィークエンド、スウェーデンのウブサラでトレイルOの集中競技会が開催された。その多様で挑戦的な試みについて報告。

大会の概要は

2007年の夏、自然分類法で歴史に名を刻んだカール・フォン・リンネの生誕300年に沸くスウェーデンの古都ウブサラの近郊で2日間のトレイルOイベント“トレイルOスーパー・ウィークエンド”が開催された。

このトレイルO大会はロング、ナイト、ミドル、スプリントとフットOの形式を習って名付けられた4回のトレイルO競技を2日間にわたって行うもの。運営の主体はリンネの名を冠するクラブ“OKリンネ”が受け持ち、障がい者のエスコートなどの支援をウブサラ大学スポーツクラブ員が担当していた。

コースプランはスウェーデントレイルOの重鎮であるオーヴェ・フレッドホルム氏と、氏の息子でナショナルランキング昨年度1位のマーチン・フレッドホルム氏が担う最高級のコントロールセッティングが用意されていた。参加者は地元スウェーデンを主体にフィンランド、ノルウェー、イタリア、米国そしてアジアからは小生一人の参加で、総勢は50名ほど。ほとんどのメンバーは翌週から始まるウクライナでもに競い合うことになる競技者であった。

開催地はウブサラ市街から15kmほど離れた野外活動施設ハンマルスゴッグであり、ここには公共交通はなく、障がいを持つ参加者も自力でまたはクラブの支援を受け自家用車で集合場所に集まることになっていた。

スウェーデントレイルOのナショナルランキングは競技会ごとに成績点を指数化して集積した方式を取っているとのこと。今回の競技会は、いわゆるE権を要求していないのでランダムに出場しているはずであるが、50位以下の番号を持つ参加者はいない。

マーチンがほとんどの参加者に名前の確認もせずに資料の配布ができるほど互いを良く知っている関係であり、実はオリエンテーリング大国スウェーデンであってもトレイルOの競技者はそれほど多くないようである。顧みて日本ではトレイルO競技会が月に一回程度は開催されているし、フットO競技と併催されることも手伝って参加者数がかなりいる。実際のところでは日本のほうが競技者人口は多いかもしれない。

第1日 ロング, ナイト

第一日目にロングとナイトが開催された。手間のかかるトレイルO競技を極めて少人数(エスコートを除いて実質7人くらいか?)で運営しているためマスタート形式が取られ、DPへの人の集中を避けるため最初の4コントロールをフリーポイントとしていた。ロングとは言っても障がい者も同等に競い合うトレイルOなので距離は特に長いわけではない。むしろ異邦人にとって難物は、いきなりスカンジナビアの地形を相手にトレイルO競技をしなければならなかったことだった。

スウェーデンではフラッグ群は最大4本(A-D)までである。ただし1フラッグのみ(すなわちAのみ)のコントロールもあって、この場合DPはない。(どこから見ても1箇所だけだからDPが必要ない。)1フラッグとはいっても遠めにセットされていたり、複雑な地形の中でよくよく見ないと判別が難しい類似の地形に置かれていたり、ちょっと角度を変えると見えなくなったりと、良く設計されている。

またスカンジナビアのトレインを経験されたことのある方なら良くご存知だろうが、氷河に土を押し流された露岩の地表を等高線で表わしているため、慣れるまでに少々感覚の入れ替えが必要であった。また、岩の多い地形のため、地図に表記されている岩とそれ以外の判別も難物であった。

タイム・コントロール(TC)はフラッグ6本で構成され、口頭で回答する形式。

驚いたのは同じフラッグセットで地図を代えて(すなわちコントロール位置の違う設問で)2度、3度とタイムコントロール競技させられたこと。後

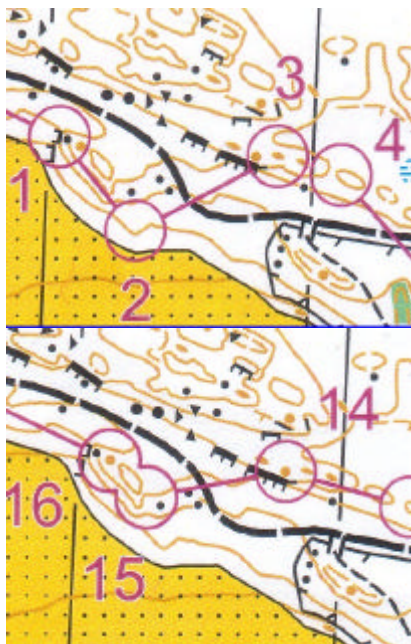
半の設問で前と同じ回答をせざるをえない(要するに、最低でも回答のどちらかが誤りということ…。)ときの悲しい気持ちは言葉にならない。

会場に戻り正解表で採点すると19コントロール中4つ違いでルンルン気分であったのもつかの間、優勝した現ナショナル・ランキングトップのステイグ・ゲルトマンは満点、しかもTCは数秒という成績で、大国スウェーデンの奥深さを実感した。

第二ステージはナイト形式。ケータリングサービスを受けた後、暗くなるまで待機となる。トレイルOナイトはもちろん初体験。ティオミラ(スウェーデン最大のナイトオリレー大会)を観戦した経験から、なまじっかな照明では北欧の夜の森は歯が立たないことが分かっていたので、友人を頼り強力なヘッドライトを持参した。しかしそれでもまだ力(光)不足であった。地元競技者は直径15cm以上もある反射板をもつものに電池を強化して競技に臨んでいる。幸い運営のオーヴェが大型のヘッドランプを調達してくれ、何とか競技に耐えられる状態になった。ナイト形式であるためフラッグの代わりに標識として3色の反射板が設定されている。照明光があたるとキラキラ光って実に分かりやすい。(ただし周りの地形は暗く奥深くよく見えない…。)コントロール設定は、夜間とはいえ情け容赦ない厳しさ。実際には見えない「こぶ」などに置かれると、周りの藪や樹木が軒並み「こぶ」に見えてしまう始末。たっぷり制限時間の130分を使う羽目となった。

第2日 ミドル, スプリント

第2日目はミドルとスプリント。ミドルはわずか500mほどの林道の両側に16コントロールが設置されていて、しかもフラッグは共有されている。DPにはコントロール番号が明示されている訳もなく、DPの位置がおかしいな…と思ったら案の定、取り違えたDPから見ていた。きちんと位置説明から考えればDPを取り違えていることが分かるはずなのに慌てているとろくなことがない。



ミドル競技の一部、コントロールが集中していることが読み取れる

スプリントは15回のタイムコントロールを延々と競技してゆく厳しいもの。1群を6個のフラッグで構成し、なんと1箇所ですら3回の競技に挑戦する。先にも記したように同じ回答をせざるを得ない悲しさを再度、味わされた。

さて競技会の終了後、「テンポO TempO」のデモンストレーションが行われ、その実際に触れることができた。テンポOとは観戦させることに主眼を置いたトレイルOの新競技形式で、IOFでは近い将来にトレイルO世界選手権に導入する方針だという。まだ競技形式の詳細は決まっていないうえ、各国でいくつかの形式で試行されているようである。スウェーデン方式（OKリンネ方式かもしれない）は競技者2人の直接対決方式であった。

ギャラリーはあらかじめコントロール位置周辺に集まっている。競技者はフラッグの見えない位置に待機していて、誘導により机と椅子の用意されたDPにつき、競技開始と同時にそれぞれに同じコントロールを示した地図が渡され、TCチェッカーにより自分の判断を回答する。先に回答した競技者が正解であれば1ポイント先取、誤っていれば相手に1ポイントが入る。この結果は、回答の「 / x」とポイントの入った競技者が「」によって掲示板の上に観客に示される。同じフラッグ群で最大5回の競技が行われ、3ポイント先取した選手が勝ちとなる。

並んで競技をするために、チェッカーを押すようなフェイントなど牽制動作ができて、いささかゲーム的な要素が

強いように感じた。最終的にどのような形で世界選手権に登場するのか注目である。



テンポOの競技状況

なお、次回のトレイルOスーパーウィークエンドは2008年10月に開催される予定とのことである。現在の日本選手の実力であれば十分に競技できると実感した。次回は日本選手が活躍することを期待したい。

（田中 徹）

編集者より

TempOについては、本号の「トレイルO NOW！」の記事も参照してください。